

第六章 迷宮の幻影少女

目の前に、レリーフの刻まれた巨大な扉があった。

繊細かつ緻密なデザインのそれは、あきらかに白き聖獣ファーナをかたどったものだった。

三人は、そのレリーフを見つめたまま、しばし言葉もなく立ちつくしていた。圧倒されていたのだ。

その大きさに。

荘厳なつくり。

そして何より、神殿が放っている一種独特の聖なる雰囲気。

歴史を感じさせる巨大な建造物との対比により、自己の存在があまりにも小さく、とるに足らないものに思えてくる。

だが、ここまで来て引き返すわけにはいかない。

レグルスは最後の一步を踏みだした。

決意を込め、扉へと手を伸ばす。

「いよいよね」

ミアネージュが緊張した面持ちでつぶやいた。

瞬間、扉が白く輝いた。

ミアネージュの言葉に反応したのか、あるいはレグルスの指先がレリーフをなぞったことがきっかけとなったのか、扉は淡い光を明滅させながら音もなく左右に開きはじめた。

扉が完全に開ききってから、三人は中へと入っていった。

「意外に明るいなだな」

レグルスが言った。

入ってすぐに視界はクリアな映像を捉えた。

そこは、広大な吹き抜けの空間、アトリウムとなっていて、ドーム型の天井がかすんで見えるほど遠くにあった。

自然に視線が上を向く。

と、奇妙な物体が目に入った。

球を基本デザインとした造形芸術らしきものが、中天でゆっくりと回転している。

モニメントのようなものかとも思ったが、とくに掲示板らしき物は見あたらない。

ぽかんと口をあけてそれをながめているリリカの隣で、ミアネージュがもっとも至極な感想を口にした。

「なんだかグロテスクなしろものね」

「……………」

「なにか、特別な意味のあるもの、なのかな？」

「さあ？」

リリカから、気の抜けたような声が返る。

はるかな過去に創られた前衛芸術と考えれば、なんとなく納得がいくような気もする。あるいはファアーナの手になる物なのか。

ただ、人目を引くデザインであることだけは確かだった。

しばらく鑑賞したあと、けっきょく何だかわからずにふたりは口を閉じ、我に返った。

「あれ、レグルスは？」

きよるきよるとリリカがあたりを見まわした。

空中でおどつている妙なオブジェを別にすれば、神殿のなかはいたって尋常な造りだった。

壁や床などの内装は、モチーフのイメージを植物に借り、曲線、曲面を用いた装飾が施されていて好感がもてた。だが、肝心のレグルスの姿が見あたらない。

ミアネージュがアトリウムの中央へとまっすぐに走っていく。

音響効果を考えて造りになっているのか、靴音がよく響いた。

アトリウムの中央付近に、ほかの床面より一段低くなった箇所があり、そこに巨大な魔法陣が描かれている。

ミアネージュの肩越しにアンダーフロアの底を覗き込み、リリカが訊いた。

「なに、あれ？」

魔法陣に描かれた文字を読みとり、ミアネージュが答える。

「ゲート、みたいね」

「ゲート？ でも瞬間移動は結界が張ってあるから不可能なんじゃ……」
リリカはそう言いかけ、はっと顔を上げた。

「あ、そっか。神殿内は瞬間移動できるってファンネリアが言ってたっけ」
ミアネージュがうなずいた。

「そして、あれが迷宮への入り口」

「え、じゃあレグルスは、ひとりで迷宮に入っただけのこと？」

「ほかに何か、理由が思いつく？」

問いかけられ、リリカはだまって首を振った。

ふたりは重力制御の魔法で、ふわりとフロアの底に降り立った。

何歩か進み、魔法陣の縁にさしかかったところで、リリカがぴたっと足を止める。

「まさかとは思うけど、トラップってこと、ないよね？」

「いくらなんでも、そこまで意地悪じゃないと思う」

返事をしながら、ミアネージュは幼なじみをふり返った。

妙に慎重な態度をいぶかしく思ったのだ。

レグルス同様、リリカとも長いつきあいなので、ミアネージュはすぐにピンときた。

「はーん、わかった」

リリカの顔をミアネージュは、ジーツと見つめる。

「な、なによ」

「リリカ、もしかして恐いんじゃない？」

「ば、ばかいわないでよっ！」

「どうだか」

ミアネージュは腕を組み、いかにも疑わしそうな目つきでリリカを見やった。

「ん、んっ」

リリカが軽く咳払いをしてごまかしにかかる。

「さっ、いくわよ！」

すべてをうやむやにするため、リリカはミアネージュの腕を掴み、魔法陣の中心へと身をおどらせた。

爪先が、六芒星を描く黒線に触れたとたん、無重量感がふたりを包み、光が流れた。

視界が戻ると、そこは一見して迷宮とわかる場所だった。

陰陽反転によるシンメトリー効果をねらったのか、転移前にいたアトリウムのそれとは逆に、黒い床に白線で魔法陣が描かれている。

ふたりはその中心に立ったまま、ぐるりと周囲を見まわした。

八角形の部屋であることがわかった。

面積は神殿のアンダーフロアとほぼ等しく、そこで剣技による試合が行えるくらいの広さはある。

石造りの壁はみごとに磨きあげられていて、等間隔に間接照明が灯っている。

今までいた神殿のホールに比べれば、ずいぶん控えめな印象を受けるが、天井もかなりの高さがあった。

「レグルスは？」

リリカがたずねた。

見ればわかるが、部屋にはだれもいない。それがわかっていながらあえてその言葉を口にしたのは、不安を無意識のうちに抑え込もうとしたことだろう。

「たぶん、あそこから……」

ミアネージュが指さした先は、天井近くの壁にもうけられた四角い窪みである。レビテーズの魔法で浮き上がり、目線をその高さにまで持っていくと、窪みの奥に扉が見えてきた。

「なんであんなとこに扉があるのよっ！」

リリカが口を尖らせる。

「選別のための一種の『ふるい』みたいなものでしょ」

「ふるい？ 空を飛ばない人なんていないわよ」

「まあね。でも……」

リリカの疑問は、扉のある壁ぎわに近づいていくにつれて、じよじよに解けていった。

「な、なに？ からだが、重い!？」

魔法力を上げないと、高度が維持できないのだ。

壁に近づけば近づくほど、どんどん重力が増していく。そんな感じだった。

「これって、まさか……」

リリカが額に脂汗を浮かべ、つぶやく。

「くっ……」

最後は全力だった。

壁に穿たれた四角い穴に無事着地したあと、リリカは床に手をつき、思いつきり息を吐きだした。

「っ、疲れたあ」

「しよっぱなからこれじゃあ、先が思いやられるわね」

リリカの隣に立ち、ミアネージュが嘆息まじりにつぶやいた。

レグルスは銀色に鈍く光る扉を前にして、思わず眉間にしわを寄せた。

レビテーズで宙に浮き、四角い穴の奥に扉があることを確認したあと、なにも考えずに跳躍してしまったので、ほとんど疲労は感じていなかった。

問題は、目の前にある開き戸とも引き戸ともつかない扉の開け方だった。

跳躍、いわゆる瞬間移動は、いぜん行ったことのある場所か、目に見えている場所にしか移動できない。つまり、扉の向こう側へは一度も行ったことがないのを通り抜けられないということだ。魔法による透視ができれば問題は解決するのだが、強力な結界が張ってあってそれも不可能だった。

レグルスはもう一度、眼前の扉をよく観察してみた。

デザインはかなり変わっている。まず、開閉のために必要な、把手のたぐいが見あたらぬ。そして、レグルスの目線で見てやや下、胸の高さぐらいのところ、半球形で掌をふたつあわせたくらいの大きさをもつ青いクリスタルがはめ込まれている。そのまわりに趣向を凝らした芸術的な紋様が描かれているのだが、それは無視してもいいはずだった。

怪しいのはどう考えてもクリスタルだった。が、手を触れても扉は開いてくれないのだ。

「どうなっただよー!」

レグルスは声を荒らげ、ふたたびクリスタルに掌を押しあててみた。

今度はさっきよりも強く。すると、そのクリスタルの中に掌がずぶずぶとのみこまれていく。

「なに!？」

物理的性質に変容をきたし、クリスタルが流動性を持ったのだ。

掌になにか硬い物がさわわり、レグルスは指先に神経を集中し、その形を探った。マグカップの柄のような、手で握るのにちょうどいい形状をしている。レグルスはそれを把手と判断し、反時計回りに九十度ほどまわしてみた。

カチツ。

「これで、開くのか？」

言いつつ、ジェルと化したクリスタルから手を抜く。

一瞬、クリスタルが強く発光し、ややあつてからゆっくりと左右に開いていった。

「つたく、手間かけさせやがって」

ぶつぶつと文句を言いながら、奥へと足を運ぶ。

通路は若干照度が落ち、薄暗くなったものの、広さは相変わらずで、十人くらい並んで歩けるほどだ。ただ肌に感じる空気が先ほどとはあきらかに違い、ひんやりと湿り気を帯びたものに変わっている。

ようやく地下迷宮にふさわしい雰囲気が出てきたといえる。

レグルスは立ち止まり、後ろをふり返った。

さすがに心配になったのだ。

「なにやってんだ、あいつら……」

そのまましばらく、ミアネージュとリリカの両名が追いつくのを待った。が、ふたりはいつこうに姿をあらわさない。

しかたなく、思念波で呼びかけようとしたそのとき。

ふいに扉が閉まった。

「!」

はつとなり、一気に緊張感が高まっていく。

そして。

ゴウウウン。

なにか重たい物どうしがこすれるときにでるような、耳障りな音が響いてきた。レグルスは異音の源を特定しようと振り向いた。

原因はすぐに知れた。

両側の分厚い壁がゆっくりとせり上がっていく。その音だった。

壁の継ぎ目から継ぎ目までを一丈として、それが五丈分、十五メートルほどの壁が天井へと引き込まれていった。

レグルスは、一人で先行しすぎたことをすぐに思い知らされることとなった。

「まじかよ……」

ミイラの大群だった。

隠し部屋に安置されていた棺の蓋がづきづきに開き、中から汚れた包帯を体中に巻きつけたミイラ男たちが、腕を前に突きだすあの独特のぎこちない動作で、通路に溢れ出てきたのだ。

レグルスは腕輪の魔法石から大剣を取りだし、鞘を払った。

手持ちの剣の中でいちばん使い慣れているはずの零式は、けつきよくルナリイが持ち去ったまま、未だに戻ってはいなかったため、やむをえない選択ではあった。

レグルスが手にしているその大剣は、諸刃の直刀で、刀身が一メートル半もある大型の剣だ。その重量ゆえ、真空波を飛ばすには不向きな代物だが、直接攻撃がヒットすればかなりの威力を発揮する。

ザシュツ！

最初の一体が胴を水平に両断され、転がった。

「思ったとおりだな」

レグルスは、足もとに転がった塊に一瞥をくれ、つぶやいた。切り口からぞいているのは黒い土である。魔法、魔操人形創造でつくりだしたクレイゴーレムに包帯を巻きつけ、らしく見せただけのまがい物だった。

見た目は不気味だが、正体がわかってしまえば、どうということのない相手といえた。

が。

二体目のミイラを袈裟懸けにし、返す刀で三体目を斬り捨てたときだった。

ん？

レグルスは、残っているミイラの中の一体が、いきなり姿を消したように思えて、目を凝らした。

そのとき。

「！」
背筋が凍りつくような寒気をおぼえ、肌があわだつた。

それが背後から放射される殺気なのだと瞬間的にひらめき、体を沈める。瞬間移動で背後をとったミイラが、鋼線のようなもので首を絞めにかかったのだ。

「が、レグルスはぎりぎりのタイミングでその攻撃を躲した。」

「ちっ」

そのまま大地を蹴り、とんぼ返りに宙を飛ぶ。

妙に動きのいいそのミイラの頭上を飛び越え、背後をとる。

だが、レグルスが次の攻撃にうつるまえに、ミイラのほうが先手を取り、振り向きざまの回し蹴りにきた。

「体術か」

レグルスは、すばやい足さばきでミイラの右側に回り込み、大剣を振るう。唸りをあげて迫る白刃をミイラは結界を張って受け止めた。

どうやら動きの速い変わり種は、魔法も使えるらしい。

そう悟ったレグルスは瞬間移動で扉を背にして立ち、背後をとられるのを防ぐと同時に、呪文の詠唱に入った。

「変わり種のミイラが凍りついたように動きを止める。」

「爆轟火炎衝ッ！」

爆炎が音速をはるかに超える速度で伝播してゆき、歩廊を地獄に変えた。

高熱と衝撃波により、ほとんど一瞬のうちに動きの鈍いミイラが消し炭と化す。あとに残ったのは、結界を張ってこれを防いだ変わり種のミイラ一体だけだっ

た。

レグルスはまっすぐに突っ込んでいきながら、呪文を唱えた。

「魔法消去ッ！」

ミイラの張っている結界が消滅した。

レグルスの動きを止めようと、ミイラは鋼線で大剣を絡め取ろうとする。が、レグルスは力任せに鋼線を引きちぎり、剣の柄頭でミイラの腹を打った。

真後ろに弾かれたミイラを念動で受けとめ、そのまま壁へと飛ばして押しつける。

身動きのとれなくなつたミイラの喉もとに、レグルスは大剣の切っ先を突きつけた。

「さてと、そろそろ正体を現してもらおうか。さもなければ……」

レグルスは、ミイラが魔法を使った時点でその正体をほぼ見抜いていた。おそらくは人間。それもかなりの手練れだ。

そのレグルスの判断は、間違つてはいなかった。

間違つてはいなかったのだが。

「きゃあ。こうさん、こうさん。おねがいだから殺さないでえ〜っ」

「へっ?」

突然、ミイラが可愛い女の子の声で命乞いをはじめ、レグルスは驚いた。思わず目が点になった。

そんな形容がぴつたりとくる顔つきで、動きを止める。

そのとき、包帯だらけの頭から、ぴよこんと長い耳が飛びだした。

ほんのりと色づき、かすかにふるえているそれは、誰がどうみてもエルフの耳以外の何ものでもなかった。

「まさか……」

レグルスがつぶやいた。

と。

スーッとミイラの幻影が消え、エルフの少女が姿を現した。

ファーナの巫女の一人が、幻影偽装の魔法でミイラに化けていたのだ。

レグルスは喉もとに突きつけていた剣を下に降ろし、念動を解いた。

「はうう」

エルフの少女が地面に降り立ち、胸をなで下ろした。

「死ぬかと思った」

レグルスはやや間を置き、少女が落ち着いた頃合いを見計らって尋ねた。

「ラミーナ、体術の方もいけたんだ?」

「えっ?」

少女は束の間きよんとしていたが、すぐに合点がいったという顔つきになり、言った。

「あ、お姉ちゃんのお友達?」

「？」

「あたしはパミーナ。ラミーナとは一卵性の双子なの。とりあえず妹ってことになってるけど……」

「双子!？」

「うん」

パミーナはこくと頷き、ついで怪訝な面持ちになった。

「あれ、お姉ちゃんから、あたしのことぜんぜん聞いてなかった？」

「えっ？ うーん、聞いたことなかったような気がするなあ。ファーナの巫女をしている双子の妹がいる。なんて話をラミーナから聞いていたとしたら、忘れたりしなかったと思うし」

「ふうん」

レグルスの返答を耳にしたパミーナは眉根を寄せて、つぶやいた。

「お姉ちゃん、後々ややこしいことになるって、分かったはずなのにどうして……」

そのまましばらく考え込んだ後、パミーナはレグルスの瞳をジーツとのぞき込むようにして尋ねた。

「んー、まさかとは思うけど。あなた、お姉ちゃんの恋人とかじゃないよね？」

「へっ？ いや、恋人ってわけじゃ……」

「でも、けっこう親しそうな感じで話しかけてきたじゃない？」

「って、いわれても……」

パミーナの探るような感じの視線に困惑しつつも、レグルスは言葉を続けた。

「友だちっていうか、知り合いつっていうか……」

「っていうか、何？」

「とにかく、君が思っているような親しい間柄じゃないのはたしかだと思う」

「そっか。それを聞いて安心しちゃった。一瞬、お姉ちゃんに先を越されちゃったかと思っただもん」

えへへっと笑って、パミーナが言う。

「でも、あたしとお姉ちゃんって、そんなに似てるかな？」

レグルスはしばし彼女の顔を凝視した。

「……………」

双子とはいえ、たいていは顔のどこかに微妙な相違点があり、見分けがつくもののだが、目の前の少女パミーナとその姉ラミーナの場合は、お手上げだった。ふたりともエルフ特有の線の細い体つきに、まったく同じ髪型、ため息が出るほど整った顔立ちをしているのだから無理もない。

「ああ、そつくり。まるつきり区別がつかない」

「そう？ ま、よく言われるけどね」

「えーと、それでラミーナは？」

「うん、いるよ、この階に。でも、手ぐすね引いて待つてるから、せいぜい気をつけて」

「そ、そうか……」

「あたしはこの階のほかにも、五階と八階も担当してるの。そこでまたあえるかもね。あ、そうそう、これ……」

パミーナはそう言いつつ、掌にのるくらい小さなオーブをレグルスに手渡し、瞬間移動であつという間に姿を消してしまった。

レグルスは、パミーナが残していった紅いオーブをしげしげとながめ、首を傾げた。

「何だこれ？」

そこは地下一階にあるファーナの巫女たちの控え室。

調度が整ったおしゃれな部屋である。

迷宮内に比べれば格段に明るい魔法照明が灯っていて、そこが地下室なのだということが信じられないほどだ。

即席のベッドにもなりそうなたりしたソファーにすわり、ひとり優雅に紅茶を飲んでいるのはラミーナだった。

テーブル上の空間に、遠隔視の魔法によってつくりだされた立体映像が映っている。迷宮の入り口付近で繰り広げられている戦いを観ながらのティータイムだった。

「ふうん。ファンネリアのひいき目じゃなく、レグルスくん、ほんとに強かったんだ」

妹があつさり負けてしまったのを見て、つぶやいた言葉がそれだった。

ほどなくして、その負けた妹パミーナが控え室に瞬間移動してきた。姉の姿を見つけると、いきなりその前に飛び、紅唇を尖らせた。

「あんな大きな剣をぶんぶか振り回してくる相手に、こんな細い鋼線一本で立ち向かわなきゃならないなんて、正気の沙汰じゃないわ」

「文句言わないの。ここはまだ地下一階なんだから、しょうがないでしょ。それに、あなただけがはじめから剣を持ってたら、ばれれば不意打ちなんて出来ないじゃない？」

「ま、たしかに、お姉ちゃんの言うとおりではあるんだけどね」

ドサツとソファーに腰を下ろしながら、パミーナが言った。

魔法石から、あらかじめ入れておいたミルクテイを取りだし、ひとくち啜ったあと、

「あの男の子、お姉ちゃんと知り合いだったみたいけど？」
そう話を振った。

「あ、うん。彼が例の……」

「ファンネリアのお気に入りで、魔剣士を目指してるっていう男の子？」

「うん。あれ、パミーナ知らなかった？ きょうから二週間は、プレオープンで

あのこたちの貸し切りになるってこと」

「え、そうなの？」

「うん」

短く答えると、ラミーナはティーカップをテーブルの上に置き、足を組みかえた。

「でも、あのこたちって？ 彼ひとりっきりしかいなかったよ？」

パミーナのもっともしごくく質問に、ラミーナは黙って遠隔視の映像を切り換えた。

「あらあら……」

扉の前でもたついているミアネージュとリリカの姿を見て、パミーナは言った。
「なにやってるんだか」

いっぷう変わった開け方をしなければならない扉の前に、ミアネージュとリリカは悪戦苦闘していた。

魔法による解呪かいじゆが必要なはず、という先入観が邪魔をして、なかなか正解へとたどりつくことができずにいたのだ。

思念波でレグルスと連絡を取ればよかったのだが、彼女たちにもそれなりのプライドがある。

けつきよく、暗黙あんもくの内にその案は闇やみに葬られた。
数分後。

あれこれと試行錯誤をくり返し、ふたりはようやく扉を開けることに成功した。「つまり、固定観念にとらわれない柔軟さを忘れるなっことを教えてくれたのよ、あの扉は」

「なによ、偉えらそうに。ミアだって、さんざん失敗したくせに」
わかったような口をきくミアネージュに腹を立て、リリカが悪態あくたいをつく。

「開けられなかった誰かさんよりはましでしょ」

「あたしだって、あと少し時間があれば気づいたわよ、あれぐらい」
ふたりは言い合いながら通路の奥へと進んでいった。

と、いきなり声がした。

「遅い！」

「あ、レグルス」

「ごめん、ちよっと扉の開け方で手間取てまっちゃって」

ミアネージュがペロツと舌をだし、近寄っていく。

レグルスは腕組みをして壁に寄りかかり、不機嫌そうに目を閉じた。

「つたく、これじゃあパーティ組んだ意味がないだろ！」

「そんな言い方しなくなったっていいでしょ！ だいたい、レグルスがひとりで先に
行っちゃうからいけないんじゃない！」

リリカがくちびるを尖らせ、抗議する。

「すぐについてくると思うだろ、ふつつは」

リリカの剣幕けんまくに押されてか、声の調子が若干じゃっかんトーンダウンする。

それでもリリカは面白くなさそうにレグルスの顔をにらみつけた。

「どうやら今回は、ミアネージュがフォローにまわらねばならないようだった。

「なんか、この辺むっとしらない？」

「……そっいえば」

話をふられたリリカも無意識のレベルでは同じようなことを感じていたのだろ
う、落ちつきなくあたりを見まわした。

ミアネージュが訊く。

「レグルス、もしかして火炎系の魔法、使わなかった？」

「使った。爆轟^{フレイムブラスト}火炎衝」

「つてことは、もう魔獣か何かがでたつてこと？」

「まあな」

「えっ？」

ミアネージュとのやりとりを耳にし、リリカがびっくりしたような顔でレグル
スを見る。

「ひとりでだいじょうぶだったの？」

「大丈夫だったから、今こうしてピンピンしてるんだろ」

「……………」

リリカは一瞬、返すべき言葉を失い、まつげを伏せた。

「レグルスのほか……………」

くるつと背中を向け、拗ねたように小声でつぶやく。

「なによ、ひとがせっかく心配してあげてるのに……………」

ミアネージュに脇腹^{わきばら}をつつかれ、レグルスは何か言いかけたが、結局その言葉
を呑み込むと。かるく咳払いして歩きだした。

「とにかく、これでようやく三人そろったんだ、さっさと行こうぜ」
だが。

ミアネージュはともかく、リリカがついてこなかった。

何歩か行ったあと、気配でそのことに気づいたレグルスは、ふり返って言った。

「リリカ、よかったら前衛^{ぜんえい}つとめてくれないか？」

リリカが面^{おもて}を上げる。

「さすがに疲れたからな、注意力が散漫^{さんまん}になってトラップとか見逃しちまうか
もしれないし」

「ふんだっ」

ちらつとレグルスの顔を見たあと、すぐにそっぽを向き紅唇を尖らせる。

「前衛ならミアに頼めばいいでしょ！」

「ミアの方向音痴っぷりは、リリカも知ってるだろ？」

「……………」

「ダンジョンで迷子になったらしゃれにならないし、トラップにはまって全滅なんて、あまりにも情けなさすぎる。そうは思わないか？」

「……………もう、しょうがないわね」

「気持ち類をふくらませながらも、リリカが駆けてくる。」

「じゃあ、あたしが先頭に立つから、ミアは後衛をおねがい」

「はいはい」

あつというまに機嫌をなおし、かつてに仕切るリリカを横目で見やりながら、ミアネージュが小声で言う。

「いま鳴いたカラスがもう笑った」

「ミア、いま何か言った？」

「ううん、何にも」

ミアネージュは大きさに首を振って否定すると、魔法石からワンドを取りだし、けっこう頼りにしてるんだから、がんばってよね」

リリカにブレスアビリティの魔法をかけてウイंकする。

なんだかんだ言っても、まだまだ子供ってことよね。

ま、胸のほうは、ちよっぴり成長したみたいだけど。

こころの中でそう付け加え、ミアネージュはくすつと微笑んだ。

地下二階へと続く階段を先に見つけておこうと、とりあえず小部屋などは無視して迷路を歩きまわった結果、三人はその最奥さいおうに開け方の難しい例の扉を見つけたした。

「この奥かな、やっぱり」

言いながら、ミアネージュはレビテースで床から二十センチほど浮き上がった。

「たぶん、そうよ」

確信を持ってそう答え、リリカがクリスタルに手を押しあてる。

だが、いくら力を込めて押しても緋色の水晶は硬質な組成そせいを変えようとはせず、ついにジェル化することはなかった。

「な、なんで？」

疑問いっぱいのリリカを押しつけ、ミアネージュが扉を観察しはじめる。
レグルスが後ろからのぞき込んだ。

「何かわかったか？」

「うん、鍵が掛かっているんだと思う」

「鍵？ 魔法のか？」

レグルスの問いに、ミアネージュは静かに首を振り、クリスタルのまわりをぐるりと取り囲むように穿たれた半球形のくぼみを指さした。

「この穴、入り口の扉にはなかったでしょ？」

レグルスはそのくぼみにちらつと一瞥をくれ、目を閉じて思案顔になった。

「たしかにそんな穴はなかったな。あ、もしかして」

レグルスは言葉とともにパミーナに貰ったオーブを取りだし、ふたりに見せた。半球形のくぼみとオーブの径は誰の目にも等しく映った。

ミアネージュはレグルスの手からオーブを受け取ると問題のくぼみに近づけてみた。

すると。

オーブはまるで磁力に引かれるかのように、スーッとくぼみにはまりこんだ。暗赤色をした大きな水晶がわずかに明るさを増した。だが、それ以上の反応は得られなかった。

「オーブが鍵の役目を果たしているってことは確かみたいね。でも、まだ開かないってことは……」

しげしげと扉を観察したあと、ミアネージュを振り返り、リリカが確認する。

「残りの穴ぜんぶに珠を^{たま}はめ込まなければダメってこと？」

「おそらくね」

「残り七つか」

言ってレグルスは大きく息を吸い込んだ。

「とにかく、戻ってみよう」

そこは何もない部屋だった。

とくに仕掛けらしいものもなく、床が鏡面のように磨き上げられているということを除けば、ダンジョン内のごくありふれた一室に思えた。

ただ一点、部屋の中央にオーブが浮いているという看過かんかできない事実じじつに目をつぶれば。

「なんか、露骨ろこつに怪しくない？」

リリカがうさんくさそうな目つきで、宙に浮いているオーブを見やった。

「ほんと、いかにも畏わなって感じ」

「レグルス、どうする？」

「どうするって言われてもな……」

リリカに判断を仰がれ、レグルスは思わず腕を組んだ。

そのとき。

「三人とも、意外と臆病なのね」

声とともに姿を現したのはラミーナだった。

彼女は目の前のオーブをすつと手にとり、いたずらっぽく微笑んだ。

「畏なんて仕掛けてなかったのに」

「ちっ」

レグルスが舌打ちする。

「あたしからのほんのささやかな贈り物プレゼント、受け取ってもらえなくて残念だわ」

指先でオーブをクルクルと回しながら、ラミーナが言う。

「さっ、次の部屋いくわよ、次の部屋！」

眉をひくつかせながらミアネージュはリリカの腕を掴つかみその場を後にした。

ひとり残ったレグルスにラミーナが告げる。

「ほかの部屋をまわっても無駄よ。だって、残りのオーブは、ゼーんぶあたしが持つてるんだから」

その声が耳に届いたのだろう、ミアネージュとリリカのふたりが慌てて部屋の中へと戻ってきた。

「それ、ほんとうなのラミーナ？」

勢い込んでミアネージュが聞いたです。

ラミーナはくちもとに曖昧あいまいな笑みを浮かべ、肯定も否定もしなかった。

「もちろん、ただでオーブをわたすわけにはいかないけど」

「どうすればいいの？」

「そうねえ、謎かけに答えられたら、ってことでいいかしら？」

「……………」
 「問題は全部で七問。一問でもミスしたらオーブはあきらめてもらおうわ。それでいい?」

三人は顔を見合わせ、うなずきあった。

「じゃあ、質問に答えてね」

ニコニコと邪気のない笑みを浮かべ、ラミーナが言った。

「質問その一。ここに、ゆで卵となま卵があるんだけど……、どっちがゆで卵でどっちがなま卵か当ててみて。ただし、魔法を使わずに十秒以内でね」

ラミーナはふたつのたまごを床の上に置く。

「ええ、魔法を使わずに?」

「ちよ、ちよつとまで!」

慌てふためくりリリカとレグルスを半眼に見つつ、ラミーナは冷酷れいこくに宣言した。

「カウント、開始!」

「だあーっ、わかんない、わかんない、わかんない、どっちなんだ!」

レグルスが頭を抱えてその場に座りこんだ。

「ゆで卵となま卵……。たしか塩水に浮かべるんじゃないかな? でも十秒しかないし。ああ、もう時間が……」

やはり、レグルス同様リリカもその場に頭を抱えて座りこんだ。

しかし、ひとり冷静さを失わなかったミアネージュは、おもむろに二つの卵を回転させた。

卵は両方とも床の上でクルクルと勢いよく回っている。

ミアネージュは、じろつとラミーナを睨にらみつけた。

「両方ともゆで卵じゃない! ラミーナのうそつき!」

「あは、あははははは……。だって、確率的には二分の一だし、当てずっぽうで正解されたら、しゃくじじゃない?」

ミアネージュが怒るのも無理はなかった。

ラミーナは、あらかじめこの問題に対する正確な知識を持っていないかぎり、正解できないように仕組んでいたのだから。

「両方ともゆで卵って、どういうことなの? ラミーナがうそつきって?」

リリカがミアネージュとラミーナ双方の顔を交互に見やりながら、たずねた。

ミアネージュは、しかたなくといった感じで説明しはじめた。

「わたしたちがあてずっぽで、どっちかがゆでで、どっちかがなまだつて答えたとするでしょ？　そういう場合を想定してラミーナは、はじめから両方をゆで卵にしておいたのよ。だってそうしておけば、わたしたちがなまだつて指定したほうの卵を割つて、中身がゆでであることを見せるだけでいいんだもん。あとは、問答無用で不正解を言いわたすことができるでしょ？」

「それってずるい」

ミアネージュの説明を聞き、リリカが口を尖らせる。

それでもラミーナが涼しい顔をしているのは、出題するがわの強みというやつだろう。

「それより……」

レグルスが口をはさんだ。

「ミア、なんで両方ともゆでだつてわかるんだ？」

「あ、そうそう、あたしもそれ知りたい」

「もう、しょうがないわね」

ミアネージュは人差し指を立て、いつもの調子で説明しはじめた。

「あのね、ゆで卵は指でかるくまわせばクルクルとよくまわるけど、なま卵だとうまくまわらずに、すぐに止まっちゃうのー！」

「ふうん、そうなんだ……。でも、どうして？」

「ゆで卵の場合は、中身が個体だから回転軸までストレートに力が伝わるけど、なま卵の場合は……それなりに粘性があるとはいえ基本的には流体だから、ある程度自由に変形するし、流動しちゃうでしょ？」

「あ、そっか。分子間の結合力の弱い流体の場合、慣性力にじゃまされて回転軸まで力が一〇〇パーセント伝わらないってことね」

「うん。そのうえ、中身が動けば重心そのものがぶれちゃうし、ベクトルが乱れるから、力があつというまに散逸さんいつしちゃうってわけ」

ミアネージュはそこでいったん言葉を切り、ウインクして言った。

「理解できたかな？」

「ん、まあね」

「……………」

ミアネージュの説明であっさり理解したりリリカの隣で、レグルスはゆで卵の殻からに顔文字っぽいものを描いて遊んでいた。

「……レグルス？」

「俺は、理論より実践を重んじるタイプなんだ。ほっといてくれ」

ふうつと、ため息をつき、ミアネージュはリリカと顔を見合わせると、肩をすくめた。

「じゃあ、試してみれば？」

そう言っただけでラミーナは、レグルスに卵を差し出した。

「これが、正真正銘のなま卵」

レグルスは、ラミーナから受け取ったなま卵を地面に置き、片手で回転させてみた。確かに、ゆで卵の時のようにくると勢いよくは回らず、すぐに止まってしまう。

「……まったくまわらないって訳でもないんじゃないか？」

レグルスは両手を使い、回転軸がぶれないよう思いっきり強く回転させてみた。

「……………」

勢いよくとはいかないものの、卵はそれなりのスピードで回転し続けている。

「まわってるぞ」

ミアネージュをふりむき、レグルスがどうだといわんばかりの口調で言う。

「それはまわるわよ。それだけ強い力でまわせば、遠心力が慣性力に打ち勝つもの」

「同じくらいの力でゆで卵をまわせば、もっと勢いよくまわるんじゃない？」

リリカの言葉をもっともだと思ったのか、レグルスはいたずら書きしてしまったゆで卵を、今しがたなま卵を回したのと同じくらいの強さで回してみた。

「え？」

「うそっ!？」

「!」

それまで、ごくふつとに卵を置いた状態……つまり、横になったまま回っていた卵が、回転しながらひょっこりと立ち上がったのだ。

「マジっ?」

卵は床の上を少しずつ移動しながら、立ったままぐるぐると回転し続けている。
「まるでコマね」

ミアネージュが目をぱちくりさせながら、率直な感想を述べた。

「おもしろーい、あたしもやってみる」

リリカが横合いから手をだし、残っていたゆで卵をさつとつかんだ。

「えいつ」

かけ声と共に回したゆで卵は、レグルスの時と同様、ひよこつと立ち上がった。

「なんで立つんだ？」

「なんでって……はい、ミア」

リリカがミアネージュに質問を振る。

「んー、卵が寝ている状態だと、左右対称じゃないけど、立てばほぼ完全に左右対称形になるから、重心がより安定するせいなんじゃないかな？」

「なるほど」

今度は素直に納得できたのか、レグルスは腕組みしたままうなずいた。

「頭で考えるより、実際に試してみたほうが、新しい何かを発見できることもあるってこともね」

リリカがにっこり微笑みながら、話をしめくくった。

「じゃ、ラミーナ、次の質問……」

ミアネージュがラミーナの姿を求め、ふり返った。

「あれっ？」

ラミーナは、三人から少し離れたところにしゃがみ込み、倒立したまま独楽こまのように回り続けるゆで卵を嬉々とした顔つきでながめていた。

どうやら、自分でも試してみたくなり、予備のゆで卵を取りだして、こっそり実地検証としゃれ込んでみたらしい。

「……………」

しばし無言の時間が流れた。

ふと、三人の視線に気づいたラミーナは、慌てて立ち上がった。

「え？ あ、な、なに？」

「ははあん、さてはラミーナも知らなかったんじゃない？」

リリカがちよっぴり意地悪そうな顔で訊きく。

「ん、んん」

かるく咳払いし、ラミーナはあさつての方角を向いたまま答えた。

「わたしだって全知全能ってわけじゃないし、知らないことの一つや二つ、あったっておかしくないでしょ」

「そうよね、あたしたちも全知全能ってわけじゃないから、ラミーナの出す問いに、ひよつとしたら答えられないかもしれないけど……」

「それとこれは、話が別」

リリカが何を言わんとしているのか、すぐに理解したラミーナは、きっぱりと言った。

腕を組み、ぷいっとそっぽを向いたままラミーナが言葉を続ける。

「全問正解しないとオーブはわたせないわ。だいたい、ここはファーナの神殿なんですからね。ファーナの巫女のわたしに、すべての権限があるってこと、忘れないでもらいたいわね」

「ちえっ」

「じゃあ、次の質問いくわよ」

床の上でぐるぐると回っていたゆで卵を魔法でさっと回収し、ラミーナは胸の内でつぶやいた。

(……でも、それじゃあ、あんまりだから、問題によっては考える時間をちよっぴり長めにしてあげる)

しかし、三人のうちの誰一人として、ラミーナの口許くちもとに浮かんだ微笑の意味に気づいたものはいなかった。

ラミーナは、魔法で鏡を取り寄せた。

全身を映しだせるほど大きな鏡だ。それを壁に据えつけ、ふり返った。

「それじゃあ、質問その四。鏡に映った像はなぜ左右が逆に映るのに上下はそのままなのか、わかる？」

かるく片目をつぶってラミーナが言う。

「時間制限は十分。カウント、開始！」

二問目の質問も三問目の質問も、知っていなければ解けない引っかけ問題で、レグルスもリリカも答えられなかった。もちろん答えたのはミアネージュである。

レグルスとリリカは互いに顔を見合わせたあと、さっとミアネージュに視線を向けた。

「ふたりして、なんでわたしを見るのよ」

「だって、ミアなら知ってるんじゃないかなって思ったから」

「もう、少しは考えなさいよ。制限時間十分もあるんだから」

「ミアが知らなかったら考えることにする」

「自分の頭で考えることやめたら、人間おしまいよ」

「……………」

ミアネージュの言葉がよほど応えたのか、リリカは不機嫌そうに口をつぐみ、鏡の掛かった壁際へと歩いていった。

質問が提示されてから五分が過ぎた。

レグルスとリリカのふたりは、自分の姿を鏡に映し、あれこれためしては首を捻^{ひね}っている。

「左右が逆に映ってるのか？ 右手は右手だし、左手は左手。頭は頭だし、足は足…………」。上下左右って分けて考えるからいけないんじゃないか」

レグルスはレビテーズで宙に浮いたまま倒立した。

「うーん。逆立ちしても変わんないよな。実は左右が逆に映っているのは錯覚に過ぎないっていうのは？」

「でも、鏡に文字を映すと逆さまに映るじゃない？」

「そう言われてみれば、そんな気もするな……………」

そのとき。

今まで黙って見ていただけだったミアネージュが、魔法石から紙とペンを取りだし、なにやらサラサラと書き綴^{つづ}った。

「ミア、なに書いてるんだ？」

倒立したままレグルスが訊^きいた。

「けっこういいとこまでいつてるからヒントをあげる」

ミアネージュは紙に書いた自分の名前を鏡に映して見せた。鏡の中には、いわゆる鏡文字が映っている。

「やっぱり、逆に映って見えるけど？」

リリカが言った。

「うん、でもその逆に映って見えてるのが左右じゃないとしたら？ なにが逆に映ってるんだと思う？」

「なにがって、言われても……」

ミアネージュがリリカにサインの入った紙を手渡した。

「紙を裏返して光に透かしてみれば、答えがわかるわ」

リリカは、ミアネージュに言われたとおり、紙を裏側から透かし見た。レグルスが隣に立ち、のぞき込む。

「あーっ、鏡に映ったのと同じ!? これって、もしかして……」

「鏡文字!? そうか!」

レグルスがぱつと顔を輝かせた。

「もう、わかったでしょ?」

「表と裏。表裏ひょうりが逆に映ってた?」

「はい、正解。よくできました」

ぱちぱちと手を叩きながら、ミアネージュはにっこり微笑んだ。

五問目、六問目はそれほどでもなかったのだが、最後の最後で難問にぶつかってしまった。

ミアネージュの苦手な十六パズルがでてきたのだ。

制限時間さえなければそれほど難しくはないはずのパズルだが、三分以内というリミットがもうけられたため、難易度がぐっと上がってしまった。

しかし、ここでリリカが頑張り、タイムアップ寸前でぎりぎりクリア。三人は胸をなで下ろしたのだった。

「それにしても正攻法で問題に取りかかってよく解けたわね」

ラミーナは、ミアネージュに七つのオーブのつまった魔法石を手渡しながら、言った。

「えっ?」

「あたしは、『制限時間内に、このパズルの絵を元通りにしてね』とは言ったけど、『このパズルを解いてね』とは言わなかったでしょ? だから、こんなふうに解いてもよかったのに」

ラミーナはそう言って、ばらばらの状態のパズルを取りだし、そのピースをいったん魔法で空中に跳ね上げ、左上の隅から正解の位置にピースを置いていった。「なっ……」

啞然とするミアネージュにラミーナが言う。

「最後の最後で見事にだまされちゃったね、ミア」

「そんなの、単なる言葉の引っかけじゃない！」

「ふふん。何とでもいいなさい」

「くっ」

「ま、約束は約束だからオーブはあげるけど、運がいただけじゃあ、ファーナの神殿は攻略できないわよ」
ぴくっ。

「あなた達みたいなくちばしの黄色いひよっこが、たった三人でどこまで進めるのか、たのしみだわ」

ふるふるふる。

声もなく、怒りに肩をふるわせるミアネージュ。

「い、いいたいことは、それだけ？」

「えっ？」

ミアネージュは、羅刹のごとき形相でラミーナに詰め寄っていった。

「ラミーナ、覚悟はできてるんでしょうね」

「ミ、ミア、なんか、顔が恐いわよ」

「とにかく、オーブさえ手に入れば、もうこっちのものよ。今までさんざん苛めてくれたお礼、してあげる」

ラミーナは、ミアネージュの異様な迫力に気圧されて、一步、二歩とうしろに下がっていく。

ミアネージュが胸の魔法石からワンドを取りだし身構えた。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ。あたしが何をしたっていうの？」

「さんざん意地悪な問題だして、苛めてくれたじゃない」

静かではあったが、その声にはあきらかに憤怒の情がこもっていた。

「あ、あたしはべつに、そんなつもり……」

「そう、じゃあ根っからの嘘つきで底意地の悪い性格なのね、ラミーナって」

ラミーナは何か言おうと口をひらきかけたが、ミアネージュの冷ややかなまなざしに出会って言葉を呑み込み、うつむいた。

同時に、ラミーナの長い耳が、叱しかられた子猫のように下を向く。

「さてと、どうしようかな」

「ごめんなさい」

ラミーナはつぶやくように言い、その場から逃れようと瞬間移動を試みた。が、一瞬ミアネージュのほうが早かった。

瞬間移動は封じられ、ラミーナは魔法の網あみに絡からめ取とられた。

「な、何をするつもり？」

ラミーナが本気で怯おびえだす。

レグルスもリリカも、ミアネージュの豹変ひょうへんぶりに言葉もなく、ただ傍観ぼうかんを決め込むしかなかった。

ミアネージュはラミーナを目に見えない魔法のロープでがんじがらめにし、床ゆかの上に転がしておいてからレグルスをふり返った。

「レグルス、好きにしていいわよ」

「へ？ 好きにしていって……」

レグルスが呆けたような顔で聞き返す。

だが、ミアネージュは何も答えず、きつと口を引き結んだままワンドを魔法石の中にしまい込んだ。

「あ、あたしを心理的に追いつめようって魂胆こんたんなら、おあいにくさま」

声を震わせながら、ラミーナが言葉を続ける。

「こ、この世界では、男の子が女の子に、むりやりエッチなことをしようとしても、できないんだってことくらい、ちゃんと知ってるんだから！」

「十二神柱の聖なる守護があるから、自分は絶対安全だって言いたいの？」

「そ、そうよ」

「……………」

しばしの間、室内は静寂に包まれた。

ミアネージュが沈黙をもって降旗こうきに代えたと受け取ったのか、ラミーナはやや落ち着きを取り戻した。

「さ、わかったでしょ？ さっさとロープを……………」

しかし、ミアネージュはラミーナの言葉をさえぎるようにして、言った。
「でも、むりやり服を脱がせて恥ずかしい思いをさせることくらいは、できたと思っただけど？」

「え？」

「実際、獣人たちが多く住んでいるギアナデルやブラッドガリアでは、のぞきによる被害が、後^{あと}を絶^たたないみたいだし」

「の、のぞきと強制脱衣は違うでしょ！」

「男の人に裸を見られちゃうってところは、いっしょじゃない」

「うっ」

ラミーナは言葉に詰まった。

何とかピンチを逃れようと、ミアネージュからレグルスへと視線を転じる。

レグルスくんは、そんなことするコじゃないよね？ ラミーナがそう言おうとした、そのとき。

「で、とどのつまり、ミアは俺に何をしろと？」

「そ、そんな……」

ラミーナの淡い期待は、一瞬にして見事なまでに裏切られた。

レグルスのすぐ横に並んで立っていたリリカが、ほうつとため息をつく。

「あいかわらず鈍いわね、レグルスは」

「鈍くてわるかったな」

「だから、こういうことなんじゃないの？」

言いつつリリカは、人差し指の先端をレグルスの背中に当て、つーつと滑らせた。

瞬間、びくつとからだを震わせたレグルスだが、すぐに合点がいったという顔つきになり、つぶやいた。

「ああ、そういうことか。昔はよくやったっけ……」

「昔はよくやった……って、あ、貴方たち、そんなに悪い子だったの？」

「んー、いまでも悪い子かな」

レグルスはニツと笑って、ラミーナの靴^{くつ}を脱がしにかかった。

「な……」

「へー、やっぱり女の子だな。かわいい足してるんだ」

「レ、レグルスくんのエッチ、変態、スケベ、いじめっこ！」
 「ふーん、そんなこと言っていていいのかな？」
 「うう」

ラミーナは、いよいよ自分が絶体絶命の窮地に追いつめられているのだということに悟らないわけにはいかなかった。

「おねがい、やめて……」

羞恥に頬を染め、いつになく弱々しい声で哀願するファーナの姫巫女を後目に、レグルスは魔法石から羽毛でつくられた猫じゃらしを取りだした。

リリカが呆れたような顔で訊く。

「まだ持ってたの、それ？」

「まあね」

うれしそうに答えて、レグルスはかがみ込んだ。むろん、ラミーナの足の裏をくすぐるためである。

「ま、まさか……」

ラミーナがうわずった声をだす。

レグルスにはへらっと笑って、おもむろに猫じゃらしの先端を足の裏に近づけていった。

しかし、次の瞬間。

がすっ。

鈍い音がした。

ラミーナの足の裏　というより踵がレグルスの顔面にヒットしたのだ。

「……………」

「あ、あはははは、ごめんなさい、つい……」

「……………」

「だ、だって、レグルスくんが悪いのよ、変なことしようとするから
 要らぬ恨みを買ったラミーナが、その後どんな地獄を見たのかは言わずもがな
 である。」

「きゃはははははは、や、やめてえ、し、しんじゃうーっ」

ラミーナの嬌声とも悲鳴ともつかぬ声がダンジョンの一室に響きわたる。

袖下から猫じゃらしの穂先を入れられ脇の下をくすぐられるという、いまだかつて経験したことの無い恥辱に、彼女は必死になって耐えていた。だが、それもそろそろ限界のようだ。

「あは、あはははは、く、くるしい、もうやめてえ」

笑いすぎて腹筋に力が入らなくなってきているのだろう。からだを折り曲げ、けほけほと咳き込みながら泣きを入れるラミーナ。

レグルスがしかたなく穂先を引くと、ラミーナは全身の力を抜き、ぐったりとなった。

「こ、こんなことして、ただですむと思ってるの？」

「そんなセリフが吐けるなら、まだ大丈夫だよな」

「あー、うそうそ、ごめんなさあい」

しかし、後の祭りであった。

「さてと、今度はどこにしようかな」

「うつつ……」

ラミーナが、上目づかにレグルスの顔色をうかがう。

「足の裏、首筋、脇の下ときたら、次は背中かな」

「ひいーん」

服を脱がせるわけにもいかず、レグルスは襟足から背中にアクセスしようと手をのばした。

が、ふとその手をとめ、つぶやいた。

「そういえば、エルフって耳が弱いつて聞いたことあるな。ちょっとためしてみるか」

「や、だめ！ だめだめだめっ。絶対にだめ。耳だけはだめなの。そんなこと、されたらお嫁にいけなくなっちゃう……」

「お嫁にとって…… オーバーだなラミーナは」

笑いながら言うレグルスに対して、ラミーナの目は真剣そのものである。

「レグルス、耳だけはやめておいたほうが……」

リリカが横からそれとなく忠告したが、遅かった。

「や、やだ、やめ……」

ふわっ。

「ああっ」

ラミーナは、長い耳の先端を羽毛でやさしくなぞられ、ぴくんとからだをふるわせた。

が、それだけである。

「うーん、いまいちだなあ。タッチがやわらかすぎたのか？」

思ったような反応が得られなかったせいか、レグルスは再度それをこころみた。さわさわさわ。

羽毛のかたまりが、あま亜麻色の髪の間から伸びている長い耳の上から下まで、すべてをくまなく動きまわる。

「あ……」

ラミーナは声を上げた。

ほっそりとした腰がびくんと弓なりにそ反る。

「！」

レグルスは、今度こそ確かな手応えを感じとった。だが……。

「あーあ、しーらないっ」と

リリカが他人事のように言った。

その直後。

「あっ、あふっ。ああん、もうだめ……」

それは、妙になまめかしく色っぽい声だった。

ぽつつと頬を染め、とろんとした目つきでラミーナがレグルスを見つめる。

「あれ、なんか様子が変だぞ？」

わけがわからず、レグルスがリリカをふり返って質問しようとしたその瞬間。ごすっ。ばきっ。どかっ。

パートナーの二人から、いきなり拳と蹴りの嵐をお見舞いされ、目の前が暗くなる。

「さっ、いくわよ」

ミアネージュが言った。

レグルスは、ミアネージュとリリカのふたりに、ずるずると引きずられるようにしてその場を後した。

「あ、あとでぜったい責任とってもらうんだからあ
部屋の中から、ラミーナの声が響いてくる。」

「おい、なんか言ってるぞ」

「無視よ無視」

リリカが前を向いたまま言う。

「とにかく今は先に進むの！」

通路に出てしばらく進んだところで、ようやくレグルスは解放された。

「いてててて、なんだっていうんだよ、いったい!？」

「もうっ、あのままあそこにいたら、どうなってたかってことくらい、わからないの?」

ミアネージュがレビテーズで宙に浮き、やや高い位置からレグルスの鼻先に指を突きつける。

「どうなってたんだ?」

「ごんっ。」

レグルスはふたたび頭を殴られた。

「つたく、相変わらず女の子のすることになると、鈍いんだから!」

ミアネージュの叱声しっせいが飛ぶ。

「あんなことやこんなことのあとに、無理やり結婚させられてたにきまつてるでしょ!」

「そ、そうなのか?」

「あのままあそこにいたら、絶対にそうなってたわ!」

「ミアの言うとおりよ!」

ミアネージュに同調し、リリカが声を尖らせる。

「もうっ、レグルスは女の子に対して無防備すぎなの!」

右左両方の耳もとで交互に怒鳴られ、レグルスはうんざりとした顔でその場に座りこんだ。

「ちっ、わかったよ。気をつければいいんだろ気をつければ」

レグルスは、またひとつ大人になった……ような気がした。

扉の鍵となっているオーブをくぼみにはめ込みながら、ミアネージュが言った。

「でもラミーナが、あんなにいじわるだとは思わなかったな」
手をやすめ、少しうつむき加減で言葉を継ぐ。

「たとえば、どんなたわいない嘘でも、傷つくひとだっているのに」

レグルスもリリカも、嘘をつかれるのが大嫌いというミアネージュの性格をきちんと理解していたので、あえて何も言わなかった。

ミアネージュが、残りのオーブをくぼみへと押し込むと、中央のクリスタルが真紅に輝いた。

「それが、ラミーナの巫女としての務めなのかもしれないけど、やっぱり……」
理性ではわかっていても感情がそれをゆるさない場合もある。

今回の一件もまさにそれだった。

ミアネージュにしても、ラミーナのことを本気で怒っているわけではなかった。ただ、最後の最後まで、態度を改めてくれなかったことが悲しかったのだ。

ミアネージュが真紅に輝く水晶に手を触れたときだった。

三人は背後にふつと人の気配を感じ、ふりむいた。

瞬間移動で現れたのだろう、そこに立っていたのはファンネリアだった。

「少し、お話ししたいことがあります。よろしいですか？」

いつも通り、どこかおっとりとしていて、おだやかな物腰だったが、まなざしは真剣そのものだった。

三人は無言でうなずいた。

何故かはわからないが、ファンネリアは、レグルスでもなくリリカでもなく、ミアネージュの瞳をまっすぐに見つめ、訊いた。

「不安や恐れといった感情は、何処からくると思いますか？」

「えっ？」

「答えてください」

質問があまりにも唐突かつ予想外のものだったので、ミアネージュはとまどった。

即答できずに、しばし考えをめぐらせる。

「……自分自身の心の弱さから、かな？」

ファンネリアはその答えに対して、肯定も否定もしなかった。変わりに、静かに目を閉じ、話しはじめた。

「今まで一度も出会ったことのない魔獣を相手にしなければならなくなったときあるいは、闇に沈む大迷宮に一人取り残されてしまったとき。人によって何に不安を感じるかは様々だと思いますが、共通している点が一つあります」

少し間をおき、ファンネリアは、ちらっとミアネージュに視線を向けたあと、言葉をつづけた。

「それは目の前に横たわっているものが、その人にとって未知の存在だということですよ」

「未知の存在？」

「そうです」

リリカの問いに、ファンネリアがうなづく。

「どんな大迷宮でも、どこに何があるのかわかっているならば、それほど不安を感じなくてすみますし、魔獣にしても、どんな能力があるのか、あらかじめ知識として持っていれば、いたずらに恐怖することもなくなります」

凜とした声でファンネリアが言う。

「つまり、知ること、知識があることが力になるのです！」

「知ることが力になる……」

レグルスがファンネリアの言葉を小声でくり返した。

「もちろん、知識だけあって、それを活かせる知恵がなければなんにもなりません。偏りのない、広範な知識があつてこそ、知恵もその光を増すのです」

「知識と知恵をうまく使いこなすことができれば、たいいていのことはなんとかなる。そういうことか？」

「はい」

レグルスの問いに、ファンネリアが力強くうなずいた。

「以上のことをふまえて、先刻せんこくのラミーナのことを考えてみてください」

「……………」

ミアネージュは、はっとなった。

ファンネリアが自分に対して何を言おうとしていたのか、何を悟ってほしかったのか、今わかった気がしたからだ。

くちびるを噛みしめ、ミアネージュはうつむいた。

そのミアネージュにかわって、リリカが言葉を返した。

「もしかしてあたしたち、何かを学ぶってことをきちんと理解してなかったのかも。いままでは、ただ単に、知らないよりは知っていたほうが生活していく上で便利だし、何かと得するからだろうって思ってたんだけど、それだけじゃなかったのね」

「……………」

「知識があれば回避できるような危険が、世の中にはたくさんある。逆に言えば、知らないことで、悪い人に騙だまされたり欺あやかれたり。直接、あたしたち自身の命にかかわるようなことだって、あるかもしれないし……………」

リリカは、ちらっとミアネージュに視線を向け、言葉を継いだ。

「……………」だから、ラミーナは、それをあたしたちに教えてくれようとしたんじゃないかな」

リリカの言葉にファンネリアは目を閉じ、深くうなずいた。

「誰だって、人に嫌われたくはありません。嘘つきで意地悪な人、そんなふうに見られたくはないはずです。でも、誰かが正確で広範な知識を持っていることが力になるということを、身をもって教えなければならぬとしたら……………。彼女はほんととはとても優しいひと。誰もやりたがらないような嫌われ役をあえてかっててくれるような」

「ファンネリア、わたし……………」

ミアネージュは顔を上げ、まっすぐにファンネリアの瞳を見つめて言葉を押しだした。

「ごめんなさい。ラミーナのほんとの気持ちも知らないで、あんなこと……………」

「わかってくれましたか」

言って、ファンネリアは微笑んだ。

そばでレグルスがポリポリと頭をかきつつ言った。

「実行犯の俺はミア以上に悪いってことだよな」

「ですが、レグルスさんはもうすでに罰を受けられましたから」

「罰？ ああ、ミアたちにたこ殴りにされたことか。でも、あんなのしょっちゅうだけだよな」

「まあ、そうなんですかがんつ。」

「あうっ」

リリカがレグルスのすねを蹴飛ばし、言った。

「レグルスは、いつもひとつ多いの!」

ファンネリアはくすくすと笑いながら、瞬間移動で姿を消した。

『ラミーナには、わたくしから謝っておきます。みなさんは気になさらずにそのまま先へ進んでください。急がないと、扉が閉じてしまって、はじめからやり直すことにもなりかねませんから』

ファンネリアの思念波が三人の頭の中で同時に響き、迷宮に静寂が訪れた。

「レグルスくん、戻ってきてくれたの?」

瞬間移動で目の前に現れたファンネリアに、ラミーナが抱きついていく。

「わたくしがレグルスさんに見えるなんて、かなり重症ですネ……」

ファンネリアはラミーナの目を覚ますため、魔法で地下の貯水槽から百リットルほどの水を呼びだし、頭上で弾けさせた。

ザアーツ。

大量の水が滝^{たき}となってふたりのからだに流れ落ちる。

「ひゃあ!」

あまりの冷たさにラミーナが悲鳴を上げ、ぶるっと頭を振った。

「気がつきましたか?」

「あ、ファンネリア?」

ラミーナは目をぱちぱちと瞬き、ファンネリアから、からだを離れた。そのあと。

両の拳を握りしめ、いきりたった。

「くーっ、あのコたち、今度あつたらただじゃおかないんだから!」

「そんなに怒らなくください。あの子たちならわかってくれましたから」

「えっ?」

ラミーナはファンネリアの瞳をまじまじと見つめ、訊いた。

「わかってくれたって、まさかファンネリア……」

「誰かが誤解をとかなければいけないでしょう?」

「誤解って、わたしは別に……」

「あの子たちに、この先もずっと意地悪で嘘つきなラミーナって印象を持たれたままでは、あなたの親友であるわたくしとしても悲しいですし」

「もう、勝手なこととして。あたしはそんなことしてくれなんて、たのんだおぼえないからね」

自分といっしょに、ずぶ濡れになってしまったファンネリアを目の前にして、ラミーナがうつむく。

「おせっかい」

わずかに首を傾け、ファンネリアはにっこり微笑んだ。

「はい」

「でも、ありがと……」

「レグルスさんと、うまくいくといいですね」

「なっ……」

ラミーナの顔が、みるみるうちに赤くなっていく。

「なに、バカなこと言ってるのよ。あたしは、年下の男の子になんか、ぜんっぜん、興味ないのー！」

「そうですか？ でも、先ほどのラミーナさんは……」

ピクッ。

「あ、あれは、いきなり耳をさわられちゃったからよ。本気じゃないんだからあ！」

「まったく意識していない男の子に耳を触られても、おなじようになります？」

「そ、それは……。で、でも、ほんとに、ほんとのほんとに、本気じゃないんだから！」

ファンネリアは、くちもとに微笑をたたえたまま、言った。

「わかりました。そういうことしておきます」

「だから、ちがうんだってばあ」

迷宮内に、ラミーナの声がいくえにもこだまし、消えていった。